

1 研究主題

「生徒の自己実現を促進する」を志向した、適切な援助や指導を行う生徒指導体制の在り方に関する研究

- 高校1年生の登校時の遅刻の指導に視点を当てて -

(1) 研究主題設定の理由

本校は、広島市の北部に位置し、交通事情の関係もあり、登校時の遅刻が生徒指導上の大きな課題となっている。本校では生徒の遅刻を、回数や登校した時刻という数値だけで捉える形で解決しようとして取り組んできた。しかしながら、この課題の根本的な解決には至っていない。

このことは、生徒一人一人と個別にかかわりをもつ教職員が、互いに十分連携することなく、生徒の内面の理解が不十分なままの状態で行っている現状に起因していると考えられる。

本研究では、登校時の遅刻の指導において、生徒の自己指導能力による自己実現の援助や指導を行うという生徒指導の根本に立ち戻り、生徒の内面の理解に基づいた生徒指導の体制を確立し、遅刻の解消を図ることとした。

(2) 遅刻の解消と自己実現とのかかわり

高等学校においては、自己実現に向けて生徒が自分の能力・適性等を明らかにし、近い将来に迫った職業生活を充実させるために機能する自己指導能力の充実を図る必要がある。

遅刻の解消に向けて生徒が自己指導能力に基づいて自己指導を行うとは、具体的には次のようなことである。まず、自分にとってなぜ遅刻することがいけないのか、どうして遅刻するのかを理解する(自己理解)。すなわち、遅刻の問題と対峙することができなければ、自己実現を志向した遅刻の解消は始まらない。次に遅刻を解消するという行動目標を設定し、さらにこの目標を達成するための行動計画を立案して実行する。そして、行動した結果を自己評

価し、問題点や課題を明確にするのである。この過程で用いられる資質や能力が自己指導能力なのであり、自己指導能力はこの過程を繰り返すことで高められ、結果として遅刻が解消されていく。

マズロー(Maslow, A. H.)によれば、自己実現に必要な自己指導能力が十分に機能するためには、基本的欲求が充足されていることが求められる。遅刻を頻繁に繰り返す生徒は、自己指導能力が不足しているだけでなく、基本的欲求の充足も十分ではないと考える。これらの生徒を援助し指導していくためには、遅刻を解消しようとする自己指導能力を高めるとともに、生徒の基本的欲求を充足させる具体的な手だてが必要である。

基本的欲求の中の「安全」「所属」「愛情」「承認」「尊敬」を求める欲求の充足には、他者との共感的な人間関係が不可欠である。共感的な人間関係とは、人間として無条件に尊重し合う態度で、お互いにありのままに自分を語り、理解し合う人間関係のことである。

学校においては、全教職員が生徒との共感的な人間関係づくりを常に意識して一人一人に適切な援助や指導を行うことが必要である(図1)。

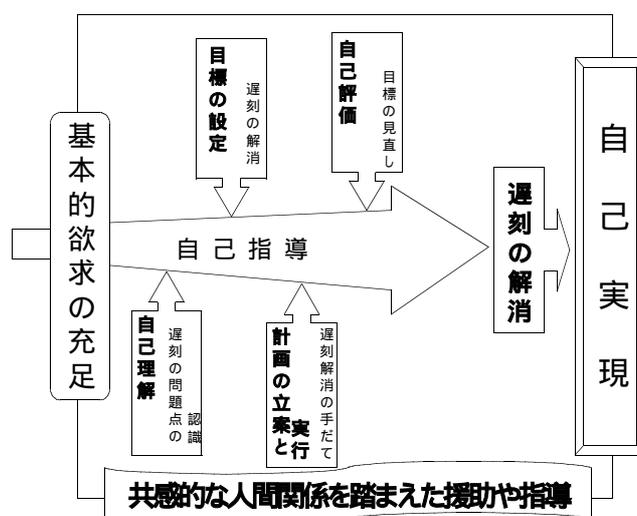


図1 遅刻の解消の過程

2 実態把握

遅刻の指導において具体的な指導体制を構築するに当たり、学校生活にかかわる実態調査を実施した。

(1) 実態調査の実施

- ア 対象 広島市立A高等学校第1学年206名
- イ 時期 平成14年11月下旬
- ウ 方法 自由記述を一部取り入れた多肢選択による質問紙法
- エ 内容

生徒の基本的欲求に関する充足度の現状
 生徒の自己指導に関する現状
 生徒の共感的な人間関係に関する現状
 生徒の自己実現の欲求に関する現状

(2) 結果の分析・考察

第1学年全体の集計と遅刻の顕著な生徒14名(以下「抽出生徒群」という)の集計を比較して分析・考察した結果を、紙幅の都合で抜粋して以下に示す。

ア 基本的欲求に関する充足度の現状

第1学年全体は睡眠不足を感じている生徒の割合が約77%と比較的高いが、抽出生徒群は約93%とさらに高い数値を示している。疲労感を感じている生徒の割合も同様に第1学年全体は約67%と高く、抽出生徒群は100%となっている(図2、)。生活が夜型であったり、明確な目的をもった生活を送っていないこと一因として推察される。

第1学年全体は学校で所属感を感じている生徒の割合が約30%、自立心があると感じている生徒の割合が約27%と低い傾向にある。抽出生徒群は学校で所属感を感じている生徒の割合が約27%、自立心があると感じている生徒の割合は約7%とさらに低い(図2、)。

このことから、生徒が興味や関心を持って取り組める課題を増やすとともに、肯定的な評価を受ける機会を多く与えることが重要であり、その際、生徒に自らの行動を自分で選択する自由を与えることが必要であると考えられる。

イ 自己指導に関する現状

第1学年全体では自己理解ができていると感じている生徒の割合が約80%、自己洞察力があると感じている生徒の割合が約50%と比較的高い。反面、自

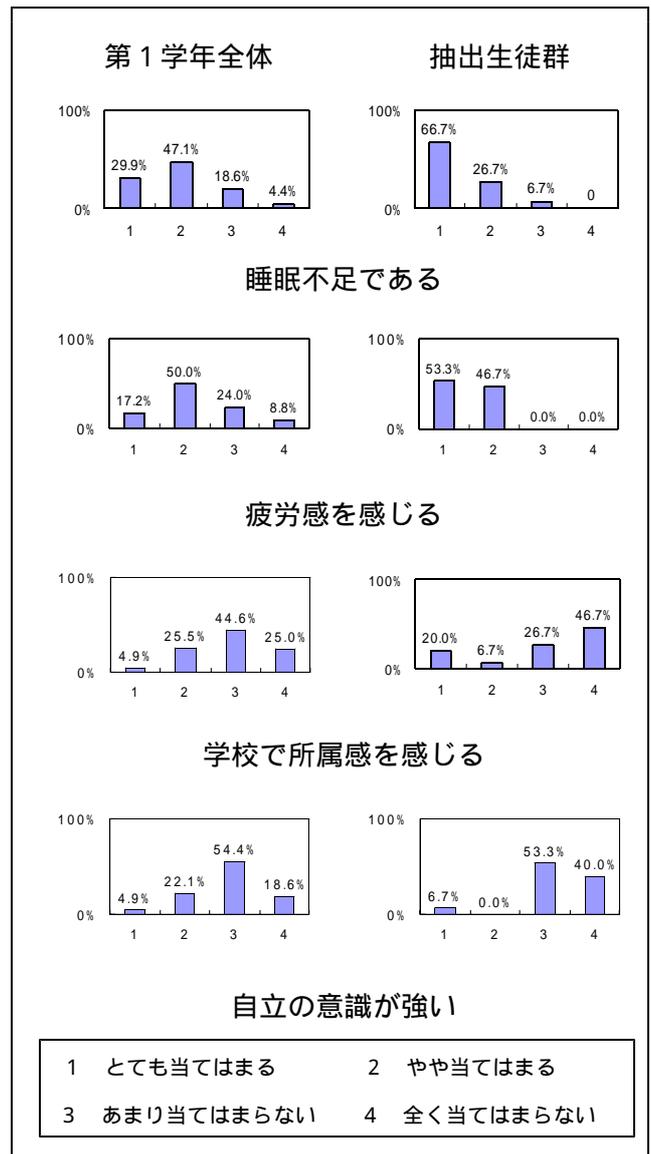


図2 基本的欲求の充足度の現状(N=204)

己肯定感をもつ生徒の割合は約29%と低い。抽出生徒群は自己理解の度合いは学年全体とほぼ同様であるが、自己肯定感があるとする生徒の割合は約47%と学年全体よりも高く、自己洞察力があるとする生徒の割合は約33%と逆に低い(図3～)。抽出生徒群は自分の言動を客観的に見つめ直すという自己指導能力が十分でないことがうかがえる。

第1学年全体は書物などの文献による基本的な情報収集ができるとする生徒の割合が約29%、インターネットによる情報収集ができるとする生徒の割合約48%と過半数未満である。抽出生徒群では、書物などの文献による基本的な情報収集ができないとする生徒の割合は約53%と高いにもかかわらず、インターネットによる情報収集ができるとする生徒の割

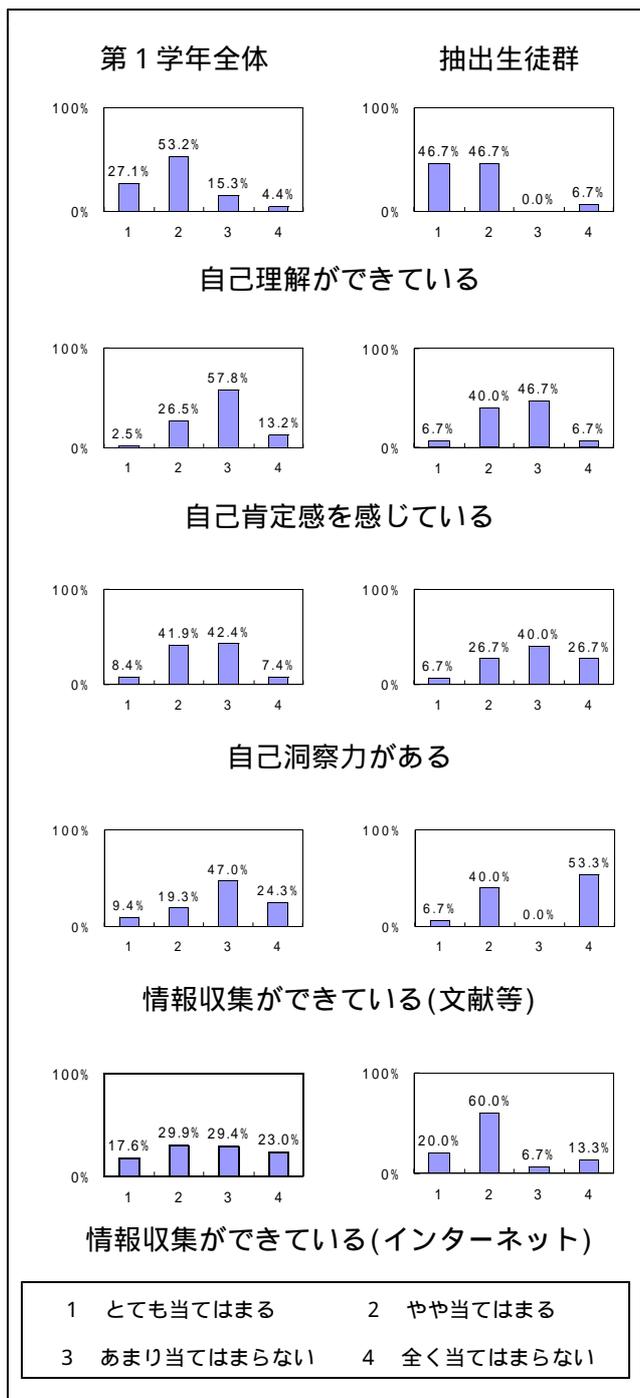


図3 自己指導の現状(N=204)

合は約80%とかなり高い(図3,)。このことは、抽出生徒群が携帯電話等を使用して、インターネットというバーチャルな世界で人とかかっていることが推察される。

ウ 共感的な人間関係に関する現状

第1学年全体では、学級担任とのかかわりはもっているが、養護教諭、教育相談担当教諭、スクールカウンセラーとのかかわりをあまりもっていないこ

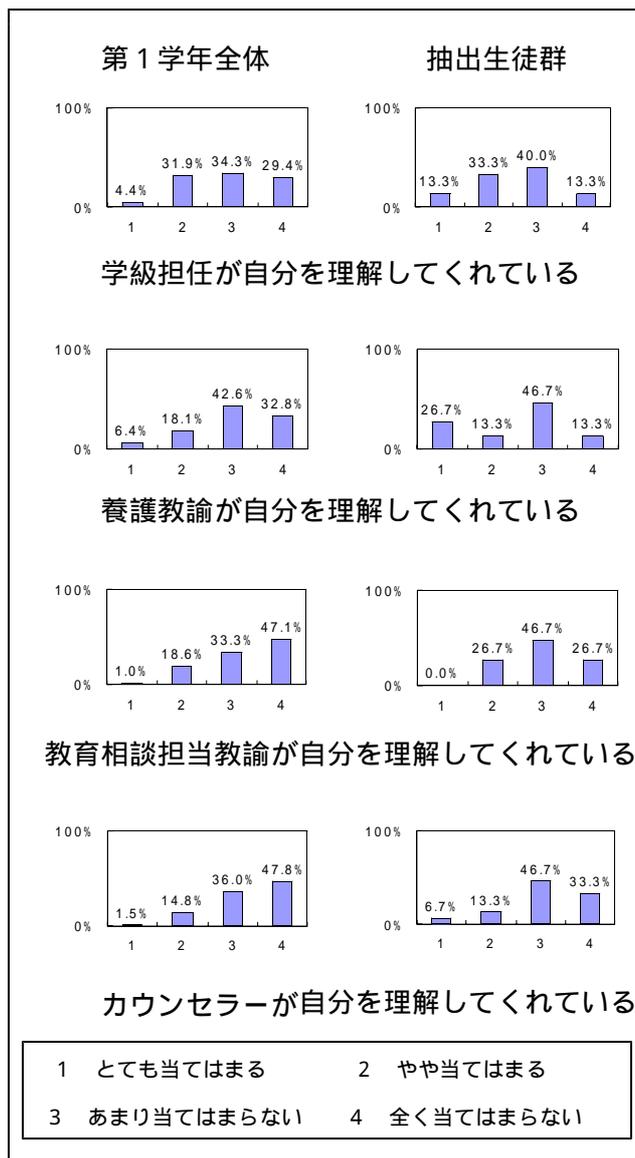


図4 共感的な人間関係の現状(N=204)

とが分かる。これは、学級担任を除くこれらの教師が、心身に悩みや不安をもっている生徒とのかかわりを主要な職務としていることから、ある意味で当然の結果と言える。

抽出生徒群は、第1学年全体と比較すると学級担任とのかかわりがやや強くあり、養護教諭とのかかわりも40%と強いことが分かる(図4 ~)。

抽出生徒群との人間関係は、直接かかわる機会が多いこともあり、どちらかという学級担任や養護教諭の方が肯定的な反応が多いものの、その割合は50%に達していない。

このことから、課題を抱えた生徒に対して、その特性に応じた積極的な支援が十分に行われていないことが推察される。

エ 自己実現の欲求に関する現状

自分の将来の夢について、第1学年全体では約26%の生徒が回答を記述しているが、抽出生徒群は13%と回答する生徒が少ない(図5, 表1)。

具体的な職種や進学希望を持ち、自己実現に向け努力している生徒もいるが、大半が明確な将来への指向性をもてないまま毎日を過ごしており、抽出生徒群にはその傾向がより見られる。

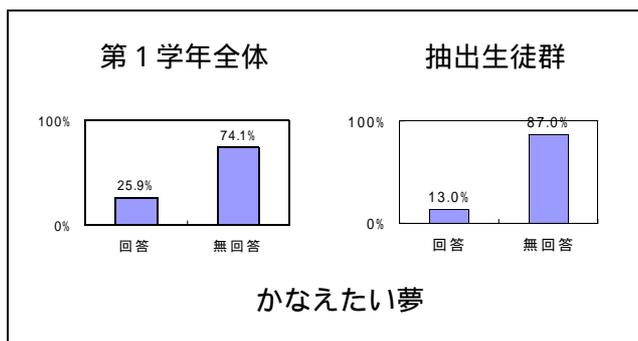


図5 自己実現の欲求の現状(N=204)

表1 かなえたい夢の内容(N=52)

職種	人数	職種以外	人数
保育士	4	希望どおりの就職	3
福祉関係	3	大学進学	2
理美容関係	4	お金持ち	2
医療関係	3	結婚	1
動物関係	3	世界平和	1
教師	2	立派な人間	1
その他	12	その他	11

3 仮説としての指導体制の構築

(1) 本研究における指導体制の設定

本校におけるこれまでの遅刻の指導は、「遅刻・早退・欠席者連絡システム」を利用し、遅刻ポイントの解消に向け取り組んできた。その詳細を図6に示す。



遅刻をして登校した生徒及び遅刻を繰り返す生徒の指導の目安とする目的で実施されている取り組みである。遅刻・早退・欠席した生徒の学年・クラス・番号・名前とともに、登校時間・遅刻理由・登録者等のデータを校内LANを利用し、本校の教職員が確認することができるシステムである。パソコンのブラウザ(インターネットエクスプローラ等)を使用して、遅刻・早退・欠席者の登録を行う。

このシステムでは、個々の生徒の遅刻状況を数値で確認することができる。遅刻した生徒が登校した時間を3段階に分け、8:31~8:45に登校した場合1ポイント、8:46~12:40に登校した場合2ポイント、12:41~16:15に登校した場合3ポイントを加算していく。ただし、遅刻の理由は必ず尋ねることとし、理由によってはポイントを加算しない場合もある。

図6 遅刻・早退・欠席者連絡システム

これまでの遅刻の指導体制の問題点を学年と協議し、改善点を次のように設定することとした。

生徒の側に立った遅刻指導の改善・充実
遅刻に対する自己指導力の向上

、の目標達成に向けた教職員の共通理解と組織体制の強化

本研究では、生徒理解が不十分な点と教職員の連携がなされていない点の改善を図り、共通理解のもと教職員が連携した指導が行える体制の構築を目指した(図7)。

遅刻の指導体制は、生徒一人一人の自己実現に向けた援助や指導を行うことを基本として、共感的な人間関係づくり(生徒の世界を肯定的に受け止める)、教育相談(遅刻の原因や理由の究明)、情報の共有(生徒理解を深め適切な指導)、保護者との連携(生徒の自立への助言や支援)という四つの柱で構成した(図8)。基本的欲求の充足については、すべての指導の基本であると考え。ただし、本研究においては、保護者との連携については実践期間等の制約により重点化しては取り扱わないこととした。

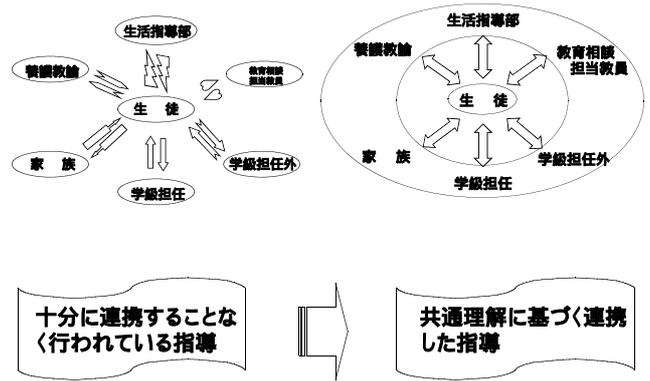


図7 遅刻の指導

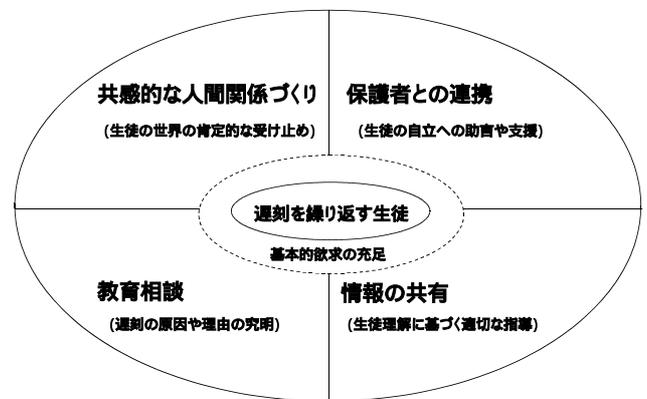


図8 遅刻指導体制

(2) 指導体制の詳細

ア 共感的な人間関係づくり

教師は尋問的、非難的、批判的態度ではなく、親和的、許容的、受容的態度で生徒に接することによって、初めて生徒は素直に自らの心を開き始めるという考えを基本に人間関係づくりに取り組む。具体的には以下のことに留意して行う。

生徒一人一人をかけがえのない人格として捉え、目の前にいる生徒を最優先する。

生徒を肯定的に見る。

生徒一人一人に積極的な関心を示す。

自分自身の心を開き素直な態度で生徒に接する。

イ 教育相談

教師は遅刻の原因や理由を教育相談の技法を使っ

た面談によって探り当てていくとともに、生徒の生活を精神的に支援する者であることを認識し、生徒が自らの問題を自らの力で解決できる能力の育成を図ることを目的として日常的な会話から意識を持って取り組むことを基本とする。

教育相談は以下のことに留意して行う。

傾聴(相手の話をしっかり聞く)

繰り返し(ポイントを捉えて繰り返す)

感情の反射(子どもが表現している感情を伝え返す)

感情の明確化(子どもの心の中にある感情を捉えてそれを伝え返す)

質問(相手に関心を持って質問する)

助言(共に考える姿勢で具体的にアドバイスする)

ウ 情報の共有

多角的な視点で生徒を捉えるため、個々の教職員の持つ情報を収集し共有することで、生徒理解をより一層深め、教師間の共通理解のもと、個々の生徒に応じた適切な指導を実施することを目的とし、校

内LANを利用した「遅刻・早退・欠席者連絡システム」と併用する形で「生徒情報共有システム」を運用することにした(図9)。

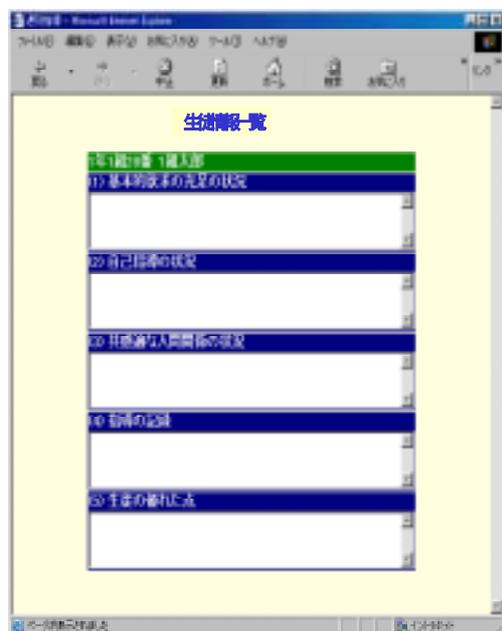
4 指導実践及び結果の分析・考察

先に述べた指導の体制を平成14年12月下旬に第1学年会との協議を通して構築し、平成15年1月7日から2月7日までの期間、この体制の基で遅刻の指導を実施した。なお、抽出生徒群に対しては特に援助と指導が必要であることを確認した。この実践内容について分析・考察する。

(1) 遅刻状況の変化

第1学年全体として遅刻率(遅刻回数の総和を授業日数の総和で除したものは)増加傾向にあるが、昨年度と比較すると、取り組みを行った時期を含めて、その増加傾向は緩やかになった(図10)。抽出生徒群においては遅刻率の減少が明らかである。

登校状況の観察では、生徒は、時間ぎりぎりのバスに乗車する場面も見られたが、抽出生徒群には、遅刻しまいとする前向きな姿勢が見られる場面が観



生徒の情報を ~ の5項目に分け、その情報を全教職員で共有することで生徒理解を深め、適切な援助や指導を行うことを目的としたシステムである。入力は簡単に行えるように例題を提示し、情報入力者については記名を行う。

基本的欲求の充足の状況

生徒一人一人が自己実現の欲求を発現させるために必要な基本的欲求の充足の状態を捉える。

自己指導の状況

個々の生徒の自己実現の欲求の充足に向けての取り組みや、自己指導能力の状況について捉える。

共感的な人間関係の状況

自己実現の欲求の充足に必要な生徒と他者との共感的な人間関係の状態を捉え、適切な支援や援助を行い、自己実現へと向かわせる。

指導の記録

個々の生徒の指導の状況を捉え、一致した指導を行う。

生徒の優れた点

生徒一人一人を偏った見方で捉えるのではなく、多くの人の視点で生徒を多角的に捉える。

留意事項としてセキュリティと情報の利用状況等を想定し、次の ~ の周知徹底を図った。

情報の共有とは、生徒を監視や管理するために行うものではない。

情報は、生徒を理解し生徒自身が自己指導を始めることができるよう、援助や指導を行うために利用されるものである。

情報は教職員の個別のパスワードによって守られており、教職員のみ見ることができるので、パスワードの管理が非

常に重要である。

ログインし情報を確認した後は、必ずログアウトを行い画面を残したままにしない。

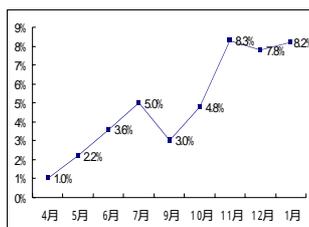
すべての情報は、教職員全体で共有できる範囲内で記入する。

生徒のプライバシーに関わる情報や生徒との人間関係にマイナスの影響が考えられる情報に関しては記入しない。学校で知り得た情報には、守秘義務が課せられている。

職務上知り得た情報を漏らしてはならない。情報をみだりに漏らすことは、生徒のプライバシーを侵害するだけでなく情報提供者や自分自身の信頼を損う。

図9 生徒情報共有システム

第1学年全体



抽出生徒群

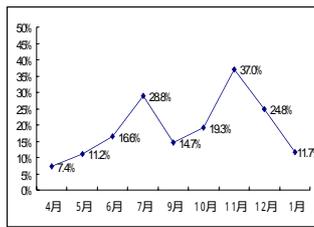


図10 月別遅刻率

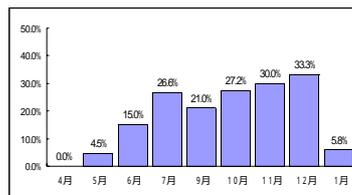


図11 Aの月間遅刻率

察された。A高等学校前バス停では、降車後、正門までの約200mを走って登校する生徒の姿が増えた。正門では、あいさつだけでなく言葉をかけるなど教職員の積極的な取り組みに対して、生徒が立ち止まり会話する場面も多く見られた。

(2) 抽出生徒群との面談

実践期間終了後、抽出生徒群(14名)との面談を行った。ここでは3名の生徒の面談を分析・考察した結果を示す。

ア 生徒A

人間関係の話から切り出したところ「友達は6人。」「相談できる先生は1人だけ。」と答えた。11月の実態調査では友達以外に自分を理解してくれていると感じている人間の存在が友達以外なかった生徒である。「信頼関係ができた先生に不安や悩みを相談することで目標を持つことができた。」と話したので目標について質問すると、「目標は就職することで、遅刻は進路を決めるときに自分にとってマイナスになる。」と答えた。

生徒Aは教師との共感的な人間関係がつけられたことで、目標を持つことができ、自己実現に向かった自己指導が深まったと考えられる。遅刻は1月に入り激減している(図11)。

イ 生徒B

生徒Bは「部活動、生活面で結構関心を持ってもらっている。」と感じており、担任と部活動の顧問の2人の教師に進路について相談していることを話した。実態調査では「動物園の飼育係になりたい。」と答えた生徒で、東京にある専門学校に進学を希望している。遅刻の原因は、「試合に出るけー疲れがたまってきたしんどくなった。」と言い、「いけんとは思ってたよ。今は部活動も勉強も頑張るとるけー」と付け加えた。生徒Bは休養の欲求が充足されず、自己指導能力が弱まったことで遅刻が増加したと推察される。

今回の取り組みで担任と部活動の顧問が、学習と部活動を両立させる手だてを援助することで、休養の欲求が充足され、自己指導能力が十分に機能した結果、自己実現に向かった自己指導が始まり、遅刻が減少したと考える(図12)。

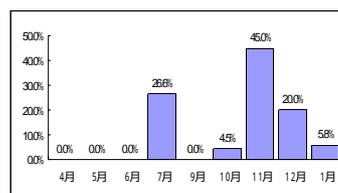


図12 Bの月間遅刻率

ウ 生徒C

担任との関係が上手くいっていないことで不満を感じている生徒である。不安や悩みを相談できる教師2人に頻繁に話を聞いてもらっている。担任は2人の教師からの情報を基に指導をはじめた。

遅刻の原因は「渋滞がひどいので。」と答えたが、生活がルーズになっており、家を出る時刻が遅くなっていったようである。実態調査から、家庭では「所属」「愛情」「自立」「承認」の欲求は満たされているが、学校においては十分に満たされていないと感じていることが分かっている。将来の夢についても無回答だったが、2人の教師との人間関係が深まるにつれて自分の将来の目標を持つことができた。

生徒Cは、担任と2人の教師が連携し指導を進めたことで、基本的欲求が充足され、自己実現のための自己指導能力が高まり、遅刻が減少してきたと考える(図13)。

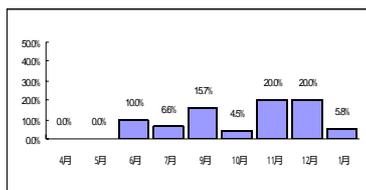


図13 Cの月間遅刻率

抽出生徒群のほとんどは、教職員の援助や指導を受けることで、共感的な人間関係をつくり、そのことが将来の目標を見つけ出す手助けとなり、自己実現に向けた努力を自分なりに始めた。その結果、遅刻の減少につながった。

(3) 第1学年にかかわる教職員との協議

抽出生徒群との面談の後、直接指導に当たった教職員との協議を行った。協議の結果得られた分析・考察は以下のとおりである。

ア 遅刻の指導について

遅刻の指導については十分に成果が表れたと考える。本校でこれまで行われていた遅刻の指導は、遅刻ポイントを減少させることに目を奪われ、遅刻ポイントが減少したことで遅刻の指導の成果が上がったように錯覚していた。早朝登校指導の強制、ボランティア活動への参加を強要する罰則的な指導で遅

刻ポイントを減少させることに取り組んできたが、個々の生徒の課題の本質的な解決には至っていなかった。

本研究の取り組みによって、遅刻の原因を探り、それを解消するための援助や指導を行うことで個々の生徒は自ら進んで遅刻の解消のための自己指導を行うようになった。

現在本校が使用している「遅刻・早退・欠席者連絡システム」は遅刻してきた生徒の登校時間や遅刻理由を確認することはできるが、個々の生徒の遅刻の原因を探りその解消を図ることには必ずしも有効に機能していない。今後システムを見直し、より機能的なものに発展させていく必要がある。

イ 共感的な人間関係づくりについて

生徒との共感的な人間関係づくりは日々の地道な取り組みが重要である。約1か月間の実践では、人間関係づくりがこれまで以上に積極的に行われた。

人間関係づくりは長期的な展望で取り組む必要があり、短期間では成果が表れないことが多いと考える。本研究における抽出生徒群に対する取り組みでは、学級担任だけでは十分に人間関係づくりができない生徒に対して、学級担任を含めた副担任・教科担任・部活動の顧問といった複数の教員が連携して人間関係づくりを行えたと考える。

ウ 教育相談について

教育相談の技法を十分に理解して実践するまでには至らなかったが、指導や援助を行う場面で遅刻の原因を探ることが効果的に行えたと考える。今後は、具体的な教育相談の事例研究が必要であることが共通理解された。

エ 「生徒情報共有システム」について

システムから得た情報を利用し、生徒の状況や人間関係を理解する手段として役立つ場面もあった。しかし、実践期間が短く、入力する情報の内容に関する共通理解が不十分で、個々の教職員から提供される情報の内容には質的にばらつきがあった。

「生徒情報共有システム」は生徒に対しいろいろなスタンスの教職員が個々の生徒を見つめ、そこから得た情報を共有することで、生徒理解が深まるとともに、共感的な人間関係をより良好にするという

可能性があり、このシステムが十分に機能していくよう、今後は課題を改善し、より一層活用していくことが望まれる。

5 研究のまとめ

本研究では、生徒の自己実現を志向した、適切な援助や指導を行うことのできる生徒指導体制の在り方について探った。具体的な手だてとして、仮説としての遅刻を解消するための生徒指導体制を構築して実践した。

その結果次のような成果を得た。

教職員の意識統一に基づいた指導の実施

「生徒情報共有システム」の開発

抽出生徒群の遅刻率の低下

しかしながら次のような課題を残した。

現行の「遅刻・早退・欠席者連絡システム」の改善

教育相談に関する事例研究の実施

「生徒情報共有システム」案の改善と実践

今後はこれらの課題を解決するとともに、「生徒一人一人の自己実現を促進する」を志向した援助や指導が適切に実施できるよう、全教育活動の中で取り組んでいきたい。

参考文献

- 岸田元美・河合伊六・佐藤修策『改訂生徒指導
新しい教育改革をふまえて』北大路書房 1990
島崎政男・吉田順・内田雅顕・斉藤武雄 編著
『個性と生きる力を育てる規律指導』学事出版
1997
大石勝男・飯田稔 編著 『問題行動への応
応』 東洋館出版社 1998
文部省『教育課程と生徒指導 高等学校編』
大蔵省印刷局 1982
文部省『生徒指導の手引き (改訂版)』
大蔵省印刷局 1981
文部省『生活体験や人間関係を豊かにする生徒
指導(中学校・高等学校編)生徒指導資料第20
集』 大蔵省印刷局 1988